

フィールドワーク[希望学] 東京大学社会科学研究所

第1回「希望がなければ…」

「若いみなさんには、ぜひ夢や希望を持つてほしいと思います」

スポーツ選手、芸能人、経営者、研究者、有名人が学校を訪れたり、スタジオで若者に語りかけるテレビ番組がある。きまつて最後に若者へメッセージを投げ、希望や夢の大切さを熱く語る。そんな映像を、ずっと私は違和感を持って眺めていた。

東京大学のなかにひっそりと社会科学研究所というところがある。社会の大切な問題を科学的に考えるために創られた。今年で60年になる研究所だ。そこで2005年から、「希望学」という、ちょっと怪しげな(?)研究を私たちは、続けている。

最近の日本社会は、希望を持ちにくい社会になっている。特に若者に、将来に希望を失った人々が増えたともいう。なぜ、この社会は希望が持ちにくいのか。希望を持つて生きるのが大切とすれば、なぜなのか。

そんなことを、データを集めたり、人々や地域の声に直接耳を澄ますために足を運ぶ「フィールドワーク」を通じて、仲間たちと真剣に考えている。

子どもの頃、私は野球選手になるのが夢だった。正直言うと夢ですらなく、野球選手に絶対なれると確信していた。30年以上も前男子の小学生は、多くが野球選手に憧れた。情報というものが無い。自分の実力の世間相場もわからない。「身のほど知らず」な夢を持ち続けた。

今の若者はどうだろう。むかしと違い、携帯電話やインターネット、多くのメディアを通じ、大人以上に情報を持つている。夢や希望など持つても、そんなもの叶うわけないと、早い段階から感じ取っている。

夢や希望の実現は困難という現代の若者の直観は正しい。希望学では2006年1月、戦後生まれの成人に「仕事と生活に関するアンケート調査」を行い、全国約2000名から回答を得た。調査では、中学3年生の頃に将来なりたい希望する仕事があったのか、希望は実現したのかをたずねた。

その結果、中学生の頃に持つていた希望を実現したことがある大人は、全体のわずか14パーセントしかいなかった。

この数字、夢は必ず叶うというには、あまりに小さい。夢や希望を持つてと有名人はいう。彼(彼女)らは才能や運に恵まれて夢を叶え、成功した限られた人たちだ。でも、ほとんどの人は違う。希望は「希(まれ)にかなう望(のぞ)み」ではない。そうむかしの私は思ってきた。

希望を持つては、意味がないのか。違う。希望はすぐには叶わないにしても、それでも希望を持つては大切なんだ。希望学を勉強しながら、最近の私は考える。

たしかに希望の多くは実現しない。失望に変わる。しかし失望や挫折を経験するなかで葛藤し、自分の本当の可能性を知る。そこで見つけた新しい希望こそ、本当の希望だ。

証拠のつが図のなかにある。同じ希望を持ち続けるのもいい。だが当初の希望が失われても、希望を成長させ進化させていけば、やりがいに出会える確率は高まっていく。

「希望がなければ挫折もできない。挫折を経なければ、出会えない本当の希望や、やりがいもある。失望や挫折を嫌って、希望を持たないなんて、つまらない。テレビでも映画でも、主人公が全然挫折を経験しないドラマなんて、おもしろくないじゃない!」

2006年9月、希望学の仲間約30人は、岩手県釜石市でフィールドワークを続けていた。釜石はかつて製鉄の町、ラグビーの町として繁栄し、地方の希望と呼ばれた。現在は高炉も休止、人口も最盛期の半分になった。お世辞にも、にぎわっているとはいえない。

しかし、そんな苦しさを経験してきた釜石だからこそ語れる本当の希望がある。きびしい状況であっても、誇りを持つて生きていこうと立ち上がり、風を吹かせようと走り続ける人たちがいる。希望と挫折を経験してきた人の言葉が勇気を与えてくれる。

地域の再生と雇用のために経営してきた遊園地があつ

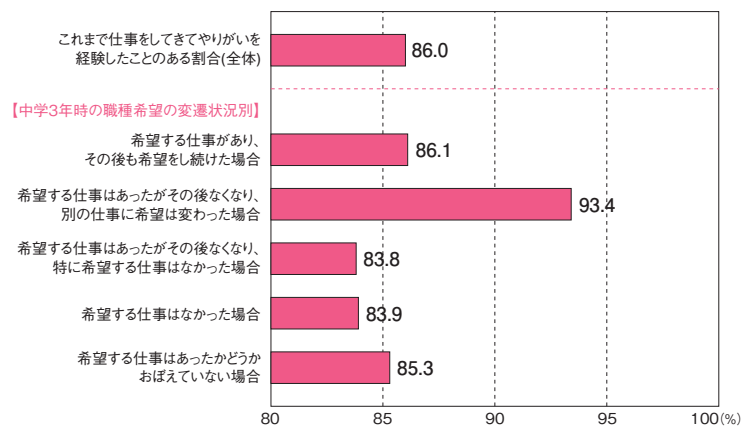
た。大雨の被害もあつて倒産、林業を地道に営みながら借金をなんとか返済。その後70歳を超え、天然水の生産販売に、再び地域の希望をつなこうと挑戦を続ける。

そんな老人がいる。「どんなに苦しいときも、三人、本当にわかってくれる仲間がいれば、必ず乗り越えられるから」。深い皺に刻まれた経験に基づき訥々(とつとつ)とし、静かな自信をもつて彼は話す。「自分は夢を持ち続けて死んでいくのが夢」と、小さな笑顔を浮かべながら。

フィールドワーク「希望学」では、希望にまつわるいろいろな話を仲間としてみたい。希望を持ちにくい時代に生きる高校生に向かいあう先生へ。「人生いろいろあるけれど、満更(まんさら)でもない」。それを伝えるキャリア教育の、お手伝いができればと思う。

(東京大学社会科学研究所教授 玄田有史)

■ 中学3年時の職種希望の変遷状況別 仕事をしてきてやりがいを経験したことのある割合



資料: 東京大学社会科学研究所・希望学プロジェクト「仕事と生活に関するアンケート調査」(2006年1月実施、全国郵送調査)